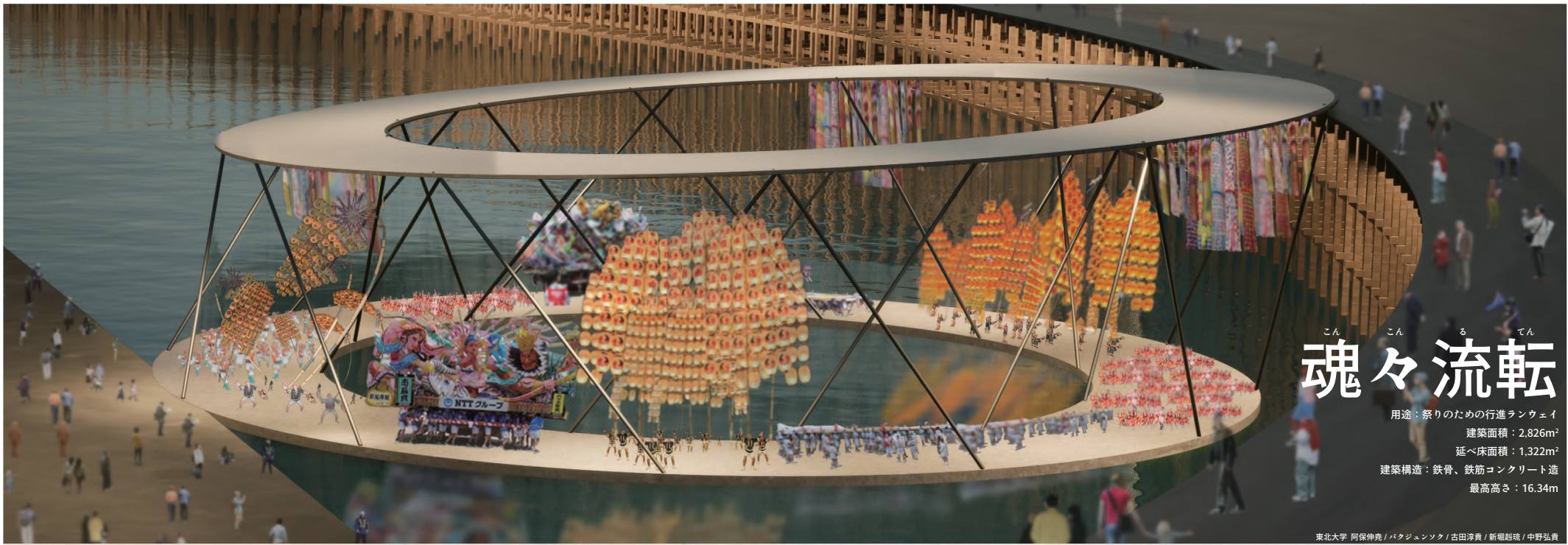




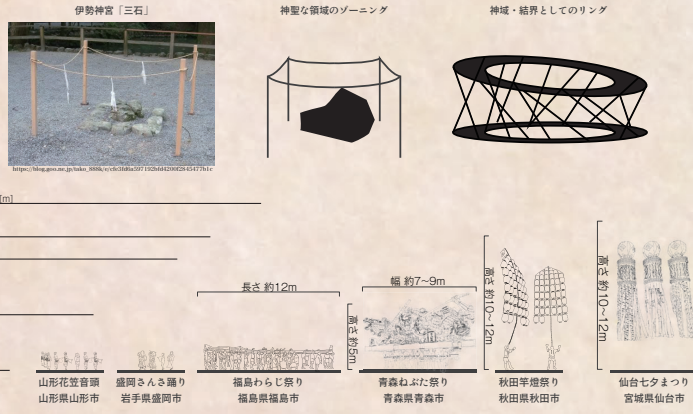
魂々流転

用途：祭りのための行進ランウェイ
建築面積：2,826m²
延べ床面積：1,322m²
建築構造：鉄骨、鉄筋コンクリート造
最高高さ：16.34m

東北大学 阿保伸亮 / パクジェンソク / 古田淳貴 / 新堀起瑠 / 中野弘貴

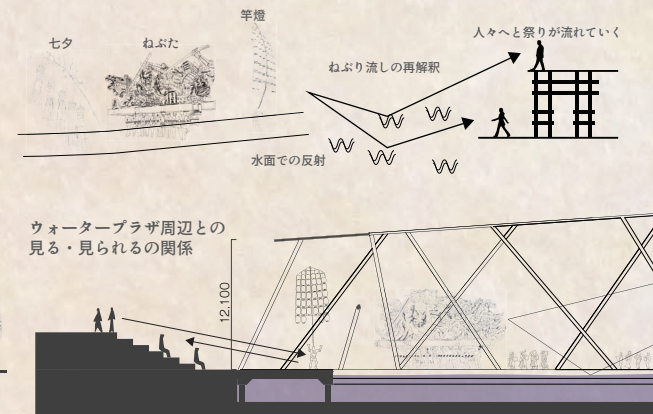
設計趣旨

東北六魂祭のために、私たちは「結界」を提案する。
一周 2km の木造リングの内に、一周 160m のリングのランウェイをつくり、柱と屋根で囲う。
東北六魂祭を、静的な展示体でなく動的な文化財と捉え、行進しながら展開する祭りの動きそのものを見せるための結界である。そのため、万博会場のウォータープラザを敷地を選び、リングの屋上からも広場からも、祭りのダイナミズムを感じられる配置とした。水面に竿燈やねぶたの光が反射する。構造形式は、内側と外側で逆方向に捻れた傾斜柱によって、薄く軽い屋根を支持する形で、結界の外からの観覧者の視線を極力遮らず、斜め柱は結界に振れる力を与え、環状に延々と続く行進を増幅して見せる手助けとなる。これらの構造体は、部材単位に分解され、万博後は東北地方の各地に運ばれ、それぞれの風土を支える構築物として再利用される。
大リングの中の小リング、円を描き続ける行進、一時的に集約された建築材料と祭りのコンテンツが再び別の場所で生きながらえること、そうした循環の風景を建ち上げる提案である。

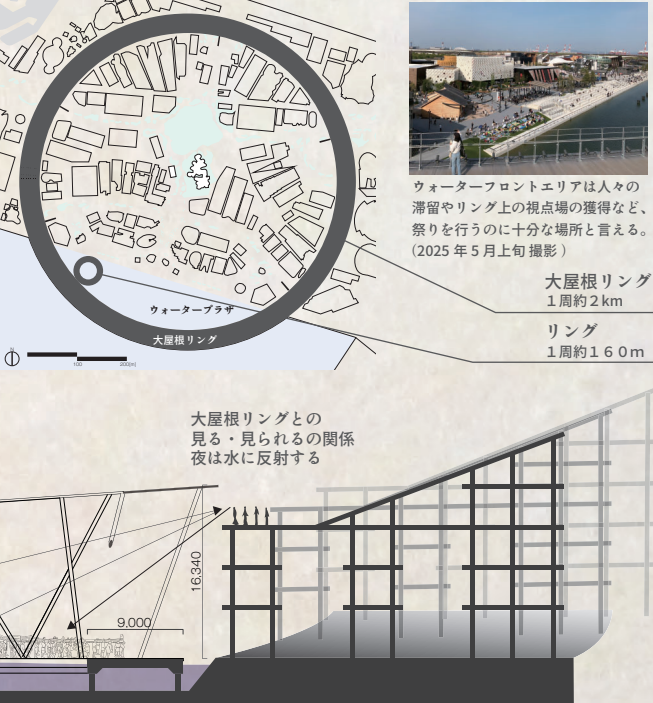


形態ダイアグラム

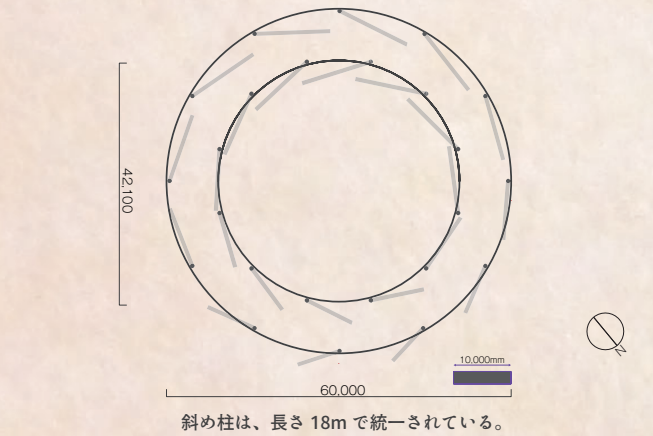
祭りは飾のような静的保存で継承されたわけではない。
動的保存によって受け継がれてきた。
一体となって歩くこと。行進する道なりはある意味聖域としての力を帯びること。そして、ヨゴレとケガレを海や川に流す「ねぶり流し」で完結すること。それらが祭りの唯一性を構成する要素だと解釈し、リニア的な行進を、周回という形でデザイン、人々が通る道を神が宿る一種の結界であるという定義、行進が海の上を跳ね、人々の目の中に飛び込んでいくという「ねぶり流し」の再解釈を行ったことによって、祭りの持つ大きな力を表現する新たなリングが誕生した。



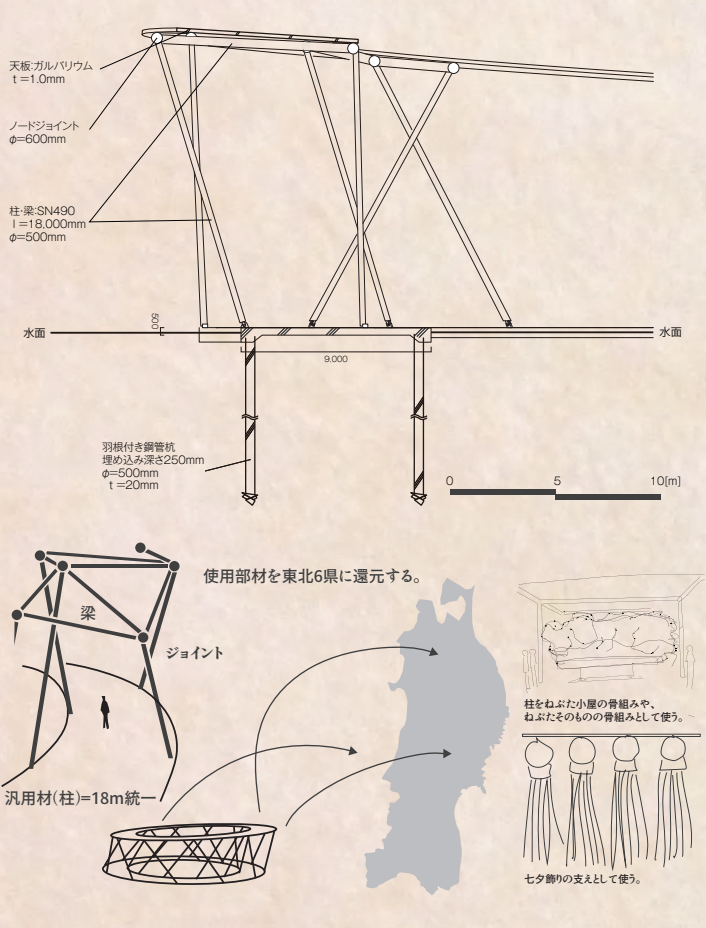
配置図



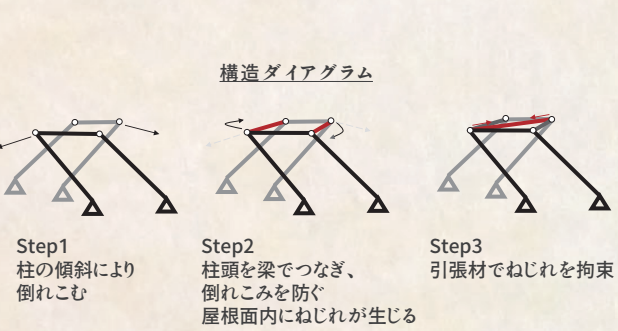
平面図



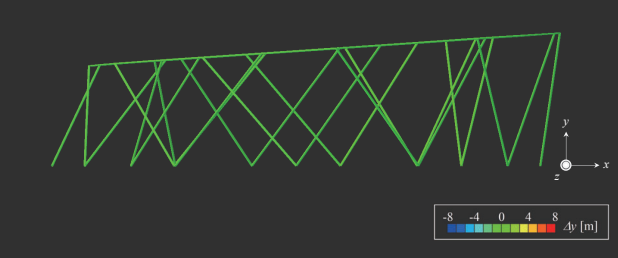
詳細断面図



有限要素解析による骨組の最適化

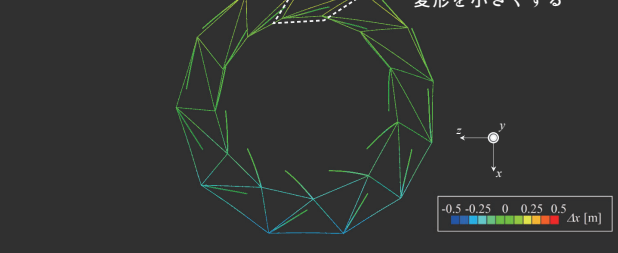


Step2 立面



それぞれの柱脚をピン接合する。
梁が内外リングの倒れ込みを拘束し、系全体が安定。

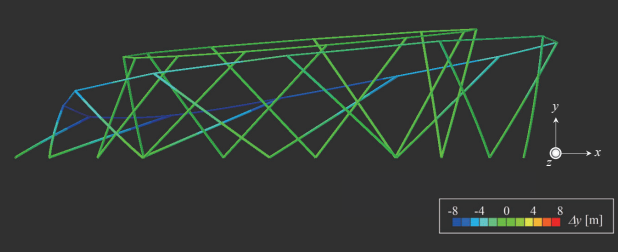
Step3



斜材の導入により、前述のねじれ変形を解決。

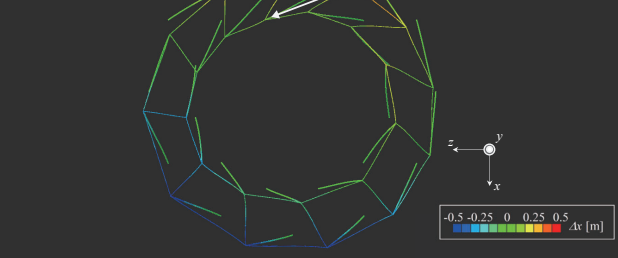


Step1



内外のリングが独立。
柱が互い違いに倒れ込み、系全体がねじれ崩壊。

Step2 平面



しかし、屋根面内にせん断ねじれが生じている。

